

一人暮らし高齢者と認知症高齢者の増加、都市部における急速な高齢化、要介護高齢者の急増、このような問題を地域の中で解決する仕組みが「地域包括ケアシステム」である。理学療法士は、要介護者の機能改善だけでなく、将来の機能変化を予測し予防する。そのために、訪問活動に携わる理学療法士は、多くが地域の他職種から頼られ、訪問の潜在的ニーズはかなりの数に上ると言われ、地域包括ケアシステムの中でも欠かせない職種である。本特集から、地域包括ケアシステムの歴史的背景、様々な地域事情、理学療法士の具体的な活動などに触れ、さらに理解を深めて、明日の訪問活動の活力としていただけることを期待する。

■地域包括ケアシステムについて（井上智貴論文）

わが国の65歳以上の人口は、2005年には総人口の20%を超え、最近の統計では既に22%に迫るなど、本格的な「超高齢社会」を迎えている。このような背景のなかで、介護保険制度をいかに継続可能な制度としていくかが重要であり、「地域包括ケアシステム」の構築が必要である。本稿では地域包括ケアシステムのあり方、地域包括ケアにおけるリハビリテーションのあり方について概説する。

■地域包括ケアの中の訪問理学療法（植松光俊論文）

理学療法士は、地域包括ケアシステムの中で即時性の高い情報の共有・活用により感染予防や転倒予防などのリスク管理、生活機能や社会参加活動向上に繋がる行動がとれる総合力が必要である。また、本稿では、訪問リハビリテーション事業所の「わかりにくさ」「使いにくさ」「提供しにくさ」「質の担保の困難」との対比から、訪問看護ステーションからの理学療法士等の訪問における「見えにくさ」や報酬制度的制約の課題についても解説した。

■訪問理学療法の展開

1. 公立みつき総合病院を核とした訪問リハビリテーション活動の展開（臂 宏泰、他論文）

本稿では、公立みつき総合病院を核とした保健、医療、福祉の連携・統合の形である地域包括ケアシステム構築の経緯とその実践を概説する。地域包括ケアシステムを支える多職種協働について訪問を中心とした連携の方法とそのあり方を、在宅復帰にかかわった事例を基に紹介する。訪問リハビリテーション活動からみえてくる視点について医療機関側からの立場で述べる。

2. サテライトの展開（鈴木 修論文）

訪問理学療法を効率的により多くの利用者へ提供するうえで、「移動時間の短縮」は大きな課題である。慈泉会では訪問看護ステーションサテライトを展開し、より利用者に近い場所から訪問リハビリテーションを届けることで移動効率を高める工夫をしてきた。本稿では、訪問看護ステーションにおけるサテライト展開を中心に、われわれの訪問リハビリテーションへの取り組みを紹介する。

3. 過疎地、都市部の活動現場から考える（田村 茂論文）

リハビリテーション医療が急性期・回復期そして維持期と分けられるにつれ、連携が重要と呼ばれるようになってきた。地域包括ケアシステムも同様に連携なしでは進まない。筆者がかかわっている過疎地と都市部の訪問看護ステーションの訪問リハビリテーションの実践から、別施設との連携より同じ施設の協働のレベルが実に働きやすいことがわかってきた。人的基盤が弱い過疎地でもリーダー・行政の姿勢で十分なスタッフを揃えることが可能である。

■とびらページ(p 869)の作品について：作・解説——牧野文幸氏（口と足で描く芸術家協会）

「起きあがる 菊ほのかなり 水のあと」（松尾芭蕉）

深川にあった芭蕉庵は水はけが悪く、ちょっとした雨にも冠水していたそうです。倒れてしまった菊が、それでも水の引いた後にしっかりと回復して、ほのかな香りを漂わせている——そういった風景を切りとった句です。

★プレゼントのお知らせ 各号につき1名の方に、牧野氏の作品を差し上げます。巻末のアンケートはがきに「プレゼント希望」の旨をお書きいただくか、件名を「プレゼント希望」としてEメール(ptj@igaku-shoin.co.jp)にて編集室までご連絡ください。希望する作品名があれば、あわせてお書き添えください。